

# 『蓑虫山人画記行』にみる考古資料の表現について

考古部門 加藤 竜

## 1) 調査の目的

当館所蔵『蓑虫山人画記行』所収の図画に、考古資料が多数掲載されている。掲載物の中には、人面付環状注口土器をはじめ当館収蔵の考古資料が含まれており、明治時代の考古資料の図画と実物とを直接比較することのできる希少な例となっている。このことは庄内(2002)によってすでに報告されているが、今回は『蓑虫山人画記行』中の考古資料の表現方法に注目し、これより古い作品との比較を通じて、蓑虫山人の考古資料に対する表現態度の変化を確認し、その要因について考察する。また、明治秋田の考古学黎明期における『蓑虫山人画記行』自体の評価についても言及したい。

## 2) 東北地方の描かれた画帖

蓑虫山人の作品には『蓑虫山人画記行』のように画帖にまとめられたタイプがいくつか存在する。このような画帖には、蓑虫山人が興味を示した風景・民俗・群像・寺社什物・考古資料など、様々な対象を画題とした図画を所収している。東北地方が描かれたものとして、以下の画帖がある。

名称	所蔵者	描かれた地域	図画の枚数	図画中の年号
『蓑虫山人写画』	個人	青森県	159枚	明治13～18年
『津軽富士百景』	個人	青森県	20枚	明治16・17年
『蓑虫山人全国周遊絵日記』	長母寺	秋田県・ 岩手県ほか	184枚 (秋田県分)	明治21～23・28年 (秋田県分)
『蓑虫山人画記行』	秋田県立博物館	秋田県・ 岩手県	62枚 50枚	明治27年 明治24年

## 3) 『蓑虫山人画記行』にみる考古資料

『蓑虫山人画記行』のうち秋田県分には、以下10名の所蔵品を掲載した21枚の図画が認められる。これらのうち3・7の一部について、実物が秋田県立博物館に収蔵されている。

	場所	所蔵者	枚数	内容	図画中の年月日
1	面潟村小池	千田敬治	4枚	縄文土器・剥片石器・磨製石斧 ・石棒ほか	
2	小泉村	奈良茂	1枚	縄文土器・石棒ほか	明治27年7月14日
3	男鹿脇本	佐藤初太郎	6枚	縄文土器・剥片石器・磨製石斧 ・土偶・石棒・土師器ほか	明治27年7月15～18日
4	男鹿	赤神神社	1枚	須恵器?	
5	男鹿北浦	斎藤節堂	1枚	石棒	
6	男鹿北浦	古仲清簾	1枚	磨製石斧・石棒ほか	
7	新関村狐森	菅原吉郎兵衛	1枚	人面付環状注口土器・注口土器	明治27年8月16日
8	馬場目村	斉藤竹蔵	3枚	縄文土器・剥片石器・磨製石斧 ・石皿・石棒ほか	明治25・26年出土
9	上井川村施田	田口喜三郎	1枚	剥片石器・独鈷石・須恵器	
10	面潟村	松田奥之助	2枚	剥片石器・石棒ほか	

#### 4) 佐藤初太郎旧蔵考古資料の図画と実物

佐藤初太郎は男鹿市脇本小学校の訓導校長を務める傍ら、考古資料を収集。東京人類学会会員でもあった。初太郎の死後、明治42年に秋田県立図書館郷土博物室に旧蔵資料が納まり、昭和54年に秋田県立博物館へ移管された。『蓑虫山人画記行』が館蔵となった際、これら考古資料の一部と図画が一致することが確認された。

掲載された資料の種別としては、縄文土器・剥片石器・土製品・石製品が主体で、わずかに土師器を含んでおり、土器類に比べて石器類の掲載数が多い傾向にある。表現方法としては、剥片石器や土製品には墨書による描画を採用し、縄文土器・磨製石斧・石棒には乾拓を採用している。墨書と実物とを比較すると、剥片石器の描線の一部に測点を落としたと思われる箇所が認められ、極力同じサイズで描こうとする表現の態度が窺われる。また、石棒の先端部の窪みについて透視図を描くなど、遺物の細部形状にも注意を払っていたことが分かる。乾拓については、定角式磨製石斧など鋭角な石器はエッジにのみ墨を当てて細い輪郭線で描出し、石棒など丸みをもつ石器は表面全体に墨を当てて塗りつぶすという具合に、形状に応じた使い分けが推測される。

#### 5) 『蓑虫山人写画』に描かれた考古資料

『蓑虫山人画記行』秋田分は明治27年に描かれており、蓑虫山人の東北遍歴の後半期に当たる。比較対象として、東北遍歴の前半期、青森県下を描いた『蓑虫山人写画』所収の考古資料図画についてみる。

考古資料の描かれた図画は10枚ある。種別は縄文土器・磨製石斧・石皿・土偶・石棒・蕨手刀・石帯があり、特定の種別に偏重する傾向は認められない。全て墨書による描画であり、中には着色したものもある。また、『蓑虫山人画記行』に多用されている乾拓は用いていない。なお、図中に寸法の注書きのあるものが一部に認められるものの、図を実物と同一のサイズに描くという意識は低いものと見受けられる。『蓑虫山人画記行』と比べて着色したものが多く点でも、形状やサイズより雰囲気重視した表現方法をとっているという見方ができるであろう。

#### 6) 考古資料の表現方法の変化と要因

考古資料を対象とした表現方法について、『蓑虫山人写画』と『蓑虫山人画記行』とを比較すると、雰囲気重視から形状・サイズ重視という表現態度の大きな変化が見受けられる。そこには、考古資料に対する蓑虫山人の客観的な記録の態度が芽生えていたのであろう。このような変化をもたらした要因はいくつかあるかもしれないが、明治19年に出会った神田孝平の影響は大きかったと思われる。神田孝平による『東京人類学会報告』誌上での、蓑虫山人の亀ヶ岡遺跡発掘の紹介は、中央学会に彼の名が知られる大きな機会となったし、官僚である傍ら東京人類学会会長を務め当時の考古学会の泰斗とも言える神田孝平との交流は、同郷出身ということも相俟って、蓑虫山人の考古資料に対する知識を深め、傾倒を促した可能性は高いだろう。

#### 7) 『蓑虫山人画記行』の評価

『蓑虫山人全国周遊絵日記』秋田分と比較すると、所収する図画のうち考古資料の割合が多く占めている（絵日記184枚中3枚、画記行62枚中21枚）。『蓑虫山人画記行』秋田分が描かれた翌年の明治28年には、秋田県扇田および岩手県水沢において展覧会を開催している。『蓑虫山人画記行』に認められる考古資料掲載の偏重傾向は、こうした展覧会、さらには「六十六庵」構想に向けた蓑虫山人の考古資料に対する傾倒をよく示している。『蓑虫山人画記行』は、秋田の風景や民俗が描かれた点で十分大きな価値を有しているが、掲載された考古資料および所蔵者の情報も、明治の考古学黎明期における資料の集積状況や人的交流を示す点で、貴重であると言えるだろう。

### 【蓑虫山人について】

蓑虫山人の略歴及び功績については以下のとおりである。

天保7年(1836)1月3日、美濃国安八郡結村（現在の岐阜県安八郡安八町）に誕生。本名は土岐源吾。守護大名の流れをくむ土岐氏の家系に庶子として生まれる。14歳の頃に出奔して諸国を遍歴し、東北地方には明治10年頃に足を踏み入れ、以降は北東北を重点的に巡る。明治29年1月、扇田町麓家の逗留を最後に東北を離れ帰郷。明治33年(1900)2月20日、身を寄せていた名古屋市長母寺で逝去。享年65歳。

蓑虫山人(仙人)の雅号は21歳の頃から使用したと言われており、他に六十六庵主人、三府七十二縣庵主人などの款記が確認されている。開くと雨露をしのぐテントのような特製の笈を使用し、自らの姿とともに作中に多く描いている。

蓑虫山人の功績としては、(1)画業、(2)築庭、(3)考古趣味が挙げられる。(1)画業については、長崎南画三筆の一人とされる日高鉄翁に師事したという説があるが、詳細は不明である。いずれ南画の影響下にある画風と言える。逗留した素封家の邸宅や寺社などに多くの作品が残されており、掛軸・屏風・襖絵のほか、絵日記などと呼ばれる画帖もある。(2)築庭については、明治11年に岩手県の水沢公園を手がけており、秋田県内でも大館市比内町扇田麓邸庭園(懐流園)、能代市二ツ井町山本邸庭園など、彼の手がけた庭園がいくつか残っている。(3)考古趣味については、考古資料の絵や拓本が多く残されているほか、作品中の書き込みや書状等から積極的に考古資料を収集していたことが窺われる。また、自ら発掘も手がけており、明治20年6月の『東京人類学会報告』で神田孝平が記した、蓑虫山人による亀ヶ岡遺跡の発掘の報告は、中央学会に初めて亀ヶ岡遺跡を紹介するものとなった。

蓑虫山人は東北地方で展覧会を開催したほか、「六十六庵」なる博物館に近いものを構想し、その設立に向けて具体的な動きも見せていたが、念願はついに叶うことはなかった。

### 【主要参考文献】

安藤直太郎 1967『蓑虫仙人』風媒社

太田原慶子 2008『蓑虫山人と青森 放浪の画家が描いた明治の青森』青森県立郷土館

庄内昭男 2002「資料紹介『蓑虫山人画記行』から－明治24年・27年における山人の旅と考古資料について－」『秋田県立博物館研究報告』第27号 秋田県立博物館 85-98頁

高橋哲華 1967『かくれたる勤王の志士 蓑虫山人』洋々社